時論公論 Ⅳ

何がしたくて首相になったのか
～岸田政権の能登半島地震への対応～

ジャーナリスト 三木寛郎

しっかりと生業を再建？

1月1日に起きた令和6年能登半島地震は、能登半島にある鳳珠郡穴水町の北東42㎞を震央として発生し、石川県輪島市と羽咋郡志賀町で震度7を観測するなど能登半島に大きな爪痕を残し、地震による家屋倒壊や土砂災害、津波などにより、死者が200人を超えるなど、甚大な被害が発生した。

1月16日の非常災害対策本部会議で、岸田文雄首相は「被災者の生活と生業の再建に関する支援パッケージを月内に取りまとめる」よう関係閣僚に指示。同対策本部のもとで、被災自治体の首長と閣僚が直接、意見交換する機会を設ける考えも示した。さらに首相は被災者の2次避難を急ぐ考えを重ねて強調し、「必ず将来、住み慣れた土地に戻ってこられるという安心がなければ、なかなか2次避難を決断することはできない」と述べ、インフラ復旧や仮設住宅など今後の見通しを被災者に示していくよう指示した。

これを受けて、政府は1月25日、令和6年能登半島地震非常災害対策本部を開き、「被災者の生活と生業支援のためのパッケージ」を決定した。

支援パッケージは、緊急に対応すべき施策を自民党の第1次提言等も踏まえながら取りまとめたもので、

（1）生活の再建
（2）生業の再建
（3）災害復旧等

の3つの柱で構成。2次避難でホテル等を利用する際の上限額を1人当たり1泊7000円から1万円に引き上げることや、被災中小企業の施設等復旧に石川県で最大15億円、富山、福井、新潟は最大3億円を補助すること等が明記された。また観光振興策策として、1人1泊2万円を上限に旅行代金を補助する「北陸応援割」の創設も盛り込まれた。

これを受けて会見に臨んだ岸田文雄総理は「被災地、被災者の立場に立って、できることは全てやる。こうした決意で被災者の生活と生業の再建支援に全力で取り組んでいく」と決意を述べたが、どうしても気になるのが〝生業の再建〟である。

コトバンクによれば、生業とは「生活するための仕事」とあり、さらに「五穀が実るようにつとめるわざ。農業。また、その作物」と説明されている。

つまり〝生業の再建〟とは、被災者が自力で復興することをそれとなく示唆しているように思えて仕方がないのである。

さらに、今回の対応において岸田首相は自らが音頭を取って「～する」と宣言するのではなく、非常災害対策本部に対策案を丸投げし、「被災者の生活と生業の再建に関する支援パッケージを月内に取りまとめる」よう関係閣僚に指示したというのである。

つまり、何か不備や落ち度があっても岸田首相にその責はなく、非常災害対策本部や関係閣僚のせいにするという意味合いを含んでいるのである。岸田氏が首相に就任してから、どうも全責任を負う陣頭指揮というよりも、他人に任せて責任逃れをする傾向が強いように感じるのは筆者だけであろうか。

そういえば、立憲民主党の後藤祐一衆院議員は衆院本会議で、岸田文雄首相が開会中の通常国会の答弁で〝しっかり〟という言葉を少なくとも1805回使ったとする集計結果を明らかにした。この発言に先立ち、後藤議員は「〝しっかり〟という言葉を使うときは〝具体策はない

けど、しっかりやっているふりをしている〟という意味だ」と述べ、首相の発言に具体策がないことを強調している。

今回のような災害において大切なのは、被災者の身になっての対応であることは言うまでもない。

また、優先されるべきは「被災者の生活と生業支援」などではなく、被災者の現状の把握と困窮する現実への対策であろう。その基本線で考えれば、〟しっかり〟対応するとは、首相にとっては〟他人事〟ともとれる対応を意味することになりかねない。そうした対応の背景にはいったい何が潜んでいるのだろう。

〟目的〟と〟手段〟が逆さま

岸田首相については、とかくその口癖が話題になる。曰く「さまざま」であり、前出の「しっかり」であり、「慎重に」であり、「丁寧な説明」であり、そして究極が「あらゆる選択肢を排除しない」である。

「あらゆる選択肢を排除しない」とは、要するに〟何でもあり〟なのであって、首相がリーダーシップを取り、全責任を負って決定するという対応とは真逆のやり方である。

こうして見てくると浮かび上がってくるのは、〟責任〟を負おうとはせず、〟目的〟を〟手段〟に差し替えて切り抜けようとする姑息な姿である。

LEV-2「SORA-Q」が撮影・送信した月面画像
（ⓒAXA／タカラトミー／ソニーグループ（株）／同志社大学）

次々と繰り出す復興のための予算も、生活の再建も、生業の再建も、あくまでも手段であって、目的は能登に今ある被災者の悲劇の救済なのではないだろうか。

宇宙航空研究開発機構（JAXA）の月探査機「SLIM」の月面着陸の際に発せられた「目標地点からの誤差が100メートル以内の〟ピンポイント着陸〟に成功した」という発表もそうだが、あくまでも終局的な〟目的〟が月面の探索であるはずなのに、いつの間にか〟手段〟であるピンポイント着陸が〟目的〟にすり替えられて、月面で逆さまになっている姿を見せながら「成功した」と言い張るような体たらくに陥ってしまうことになりかねないのだ。

JAXAの事業概要・目的には、確かに「将来月惑星探査で必須の『降りたいところに降りる』ための高精度着陸技術の習得（他国の1桁上の精度目標）」と記されているが、最終的な目的は〟ピンポイント着陸〟ではなく、宇宙探査にあるはずである。

文字通り、〟目的〟と〟手段〟が逆さまになってはいないだろうか。

JAXAの「成功した」も、岸田首相の「しっかり」や「さまざま」や「慎重に」や「丁寧な説明」、そして「あらゆる選択肢を排除しない」も、そこにあるのは最終目標の定まっていない方策や施策を、それも〟人任せ〟にし、目的を手段とすり替えて逆さまにし、平然としている最高責任者の姿を現してはいないだろうか。

ふと、岸田首相は「とにかく首相になりたかった」のであり、首相になって「…をしたかった」人ではないのではないかと思う今日この頃である。